

クロンダイクのクリスマス

ジャック・ロンドン

スチュワート川河口

ノース・ウエスト準州

一八九七年一月二十五日

愛する母さんへ

今はここにいます。みんな無事で体調もいい。腰を落ちつけて快適に冬を越してるよ。手紙がまだひとつも届かないな。家からの手紙を、僕らがどれほど楽しみにしているかはわかるよね。こっちは今年でいちばん日が短い時期で、太陽がのぼらない。十二時になってもだよ。

ハイラムおじさんとカーターさんは、砂鉱場を登記しにドーソンへ出かけた。手紙があれば、ついでに持って帰ってきてくれるんだ。雪道を進まないといけないから、犬ぞりで行ったよ。クリスマスのごちそうがあるから、二人にはどうしても帰ってきてほしかった。でもどうやら、ジョージ兄さんと二人きりで食べることになりそうだよ。

調理担当は僕だから、楽しい夕食になること間違いないよね。まずは定番のものから始めようと思う。揚げたベーコン^{b a c o n}に、焼き豆^{beans}、生地から作ったふくらとしたパン^{bread}、それに――

困ったような顔をして、怪訝そうにぽりぽりと頭をとかき、ペンを置いた。一度か二度は、つづきを書こうとしてみたが結局あきらめた。もううんざりだという表情だ。彼は十八か十九歳のがっちりとした若者である。その目にひそむ楽しげなきらめきを見れば、わざとらしい不満は見せかけだということがわかる。

居心地のいい、こぢんまりとした小屋に彼は座っていた。切つてそのままの丸太でできた、一〇×一二フィートに満たない家のなかは、燃えさかるユーコンストーブで暖かい。彼にとつてここは、これまでに住んだどの家よりも落ちつける場所のように思えた——もちろん、いつも心に浮かぶ、本当の家は別として。

二段ベッドがふたつに、テーブルとストーブがある。これだけで小屋の三分の二はいっぱいなのに、あまったスペースがすき間なく使われていた。リボルバー、ライフル、狩猟用ナイフ、それにベルトや衣服などが、絶妙に混ざりあつて壁三面にかけられている。のこり一面は、小屋じゅうの調理道具が置かれた棚で隠れてしまつていた。もう朝の十一時だというのに、外には黄昏のようなものが広がっている。スラッシュランプがなければ、室内も真つ暗だつたろう。このランプは、底の浅いブリキのコップにベーコンの脂を満たしただけのものだ。詰めこまれた綿が灯心の代わりになっている。火の熱がまたたく間に脂を溶かしていった。

両腕でほお杖をついて座り、彼は我を忘れてランプをまじまじと見つめていた。

とくに興味があつたわけではなく、見ていることに気づきもしなかった。夕食にほかになにか作れないものかと必死に考えていたのだ。

このとき勢いよくドアが開いた。すさまじい冷氣とともに体格のいい青年が、敷居で靴を脱ぎとばし入ってきた。

「そろそろ飯の時間だよな？」手袋を脱ぎながら、青年は愛想なくたずねた。しかし弟のクラレンスは「*b a c o n*」も「*beans*」も「*b a n*」も、すべて「*b*」で始まるという発見をしたところで、返事をしなかった。雪まみれの顔をストーブにかざしたジョージに不満はなかった。うすい鉄板に落ちる雪の音が静かになりだすと、クラレンスは質問の形で口を開いてやった。

「『*b*』ってなんの略だと思う？」

「そりやお前、悪いだろ」即答だった。

「僕もそう思う」クラレンスが堂々とした面持ちで息をついた。

「そんなことより飯はどうなってるんだ？ 当番はおまえだろ？ もう取りかから

ないと。一体なにをしてたんだ？ なるほど！ 手紙か！ ちょっと見せてみる」

「ベーコン、豆、パン」そこまで読むと、ジョージは黙ってしまった。「クリスマスのごちそうがこれっぽっちだなんて言っただうする。心配させるだけじゃないか。そうだな、ドライアップルはなかったか？」

「半カップなら。パイを作るには足りないよ」

「かさは増えるだろ、馬鹿だな。ほら、座ってアップルパイも書き足せ。それからダンプリングも一緒にな。やってみようぜ——りんごをひとつずつ生地に入れて煮ればいいんだ。心配するな。これで俺たちが王子さまのように暮らしてるって思うはずさ」

クラレンスは兄の言うとおりにした。弟の疑わしそうな表情を見ると、ジョージまで自信をなくしてしまった。

「まあ、見込みはうすいか」ジョージは考えていた。「ほかになにか作れないかな——パンにパンケーキだろ——それから——そうだ、グレイビーソースを忘れちゃ

いけない」

「豆なら、煮ても焼いても揚げてもいいけど」クラレンスが提案した。「ベーコンは揚げる以外どうすればいいのか、わからないよ」

「ゆがくのさ。これでまた一品ということになるから、ぜんぶで九品。そもそも、あといくつ必要なんだ？」それから話題を変えようとした。「外の温度、どれくらいだと思う？」

クラレンスは、ドアにできた割れ目にまで忍びこむ氷をしげしげと見つめ、きっぱりと答えた。「五十は超えてる」

「俺の体感では六五つてところだ。しかもまだ下がりつつある」ジョージは声がはずむのをおさえられなかった。どうしてかと訊かれても、彼にはわからなかっただろう。

「水は華氏三二度で凍るから」クラレンスは計算を始めた。「氷点下九七度というところか。まいったな！ 故郷の人間なら目も開けられない！」

子どもらしく、こんなに寒いのはなぜどうしてと白熱しているうち、変化のっぽい料理のことをつかの間忘れていた。しかし強い空腹感にさいなまれると、二人して食することから逃げられなくなった。十二時になり、兄弟はささやかな料理を作りはじめた。

ジョージはベーコンを探しに貯蔵庫に入り、ほかにもなにか見つからないかと隅々をあさりだした。貯蔵庫という名の、つねに腹をすかした北国の犬から食料を守るその場所は、小屋の裏手に建っている。クラレンスは兄がうるさくたてる物音を聞いていた。「あつた、あつた！^{ユリイカ ユリイカ}」という、心おどらせたジョージの声がすると、弟は走って様子を見に行った。

「天の恵みだ！^{マ ナ} 弟よ！ 天の恵みだ！^{マ ナ} 飢えたイスラエルの子どもたちのために、空から落ちてきたんだ」と、ジョージが頭上で大きな缶を振りながら叫んだ。「モックタートルスープだ。道具箱に入ってた」缶を手には小屋へ戻る途中、兄が説明した。彼の言うとおり、一クオート缶は特製レトルトの濃厚モックタートルスープだっ

た。兄弟は歌いおどり、金鉾を見つけたかのように騒いだ。クラレンスは手紙の献立表にスープを書き足し、ジョージはスープをふたつの、いやもっと多くの料理に変身させようと考えていた。この種の仕事に、ジョージの才能は花ひらいたようだった。しかし、食欲をそる料理を彼がいくつ思いつくことができたか、それは知る由もない。小屋前の川岸に、そり犬の一団が停まる音が聞こえたからだ。

次の瞬間にドアが開き、二人の男が入ってきた。異様な光景だった。頭は巨大な氷のボールと化し、本来なら口があるべき場所に小さな穴が開いている。二人はその穴を使って息をしていた。口を開けることも喋ることもできないまま、兄弟と握手をした来客はストープに駆けよった。クラレンスとジョージは目くばせをし、おもしろそうに珍客を見つめていた。

「そのだな、いきさつはこうだ」男の一人が、頬ひげに残る氷を振りはらい話し始めた

「おれはこいつと今日で二か月も、近くのメイジーマイを進んできた。食べるもん

は生の肉くらいのもんさ。すこしの小麦粉も豆もベーコンもありやしない。そこで
こいつとちよつくら話しあい、考えてみたんだ。そうしておれは言った。『こんなのは
どうだ、ジム？ 分水嶺をこえてユーコンに行き、見つけた野營地キャンプをおそつて、人
間らしい食いのをとりもどすつてのは？ いつものようなクリスマスのごちそう
を手に入れるつてのは？』ジムは『そいつはいい』と言った。そんなわけでここに
きた。肉にこまっではないか？ 百ポンドかそこらは、外のそりにあんだぜ」

クラレンスとジョージがあたたく歓迎すると、男は胸をなでおろした。同時に
もう一人の男が、口をふさぐ最後のかけらを取つて話した。「なあきみたち、パ
ンがあればちよいと分けてくれないかい。腹ぺこでさ、ほんのちよつとでいいから

――」

「だまってる、ジム！」相棒が怒鳴った。「腹がへってるのは見りやわかんた。食べ
るもんにはこまっでないだろう？」

「ああ」不満そうな返事だった。「けどよ、生の肉だけだぜ」

クラレンスがこのやりとりを終わらせた。サワーブレッドと冷えたベーコンをテーブルに置いたのだ。彼はまず、夕食を考えて今は食べないようにと約束させた。飢えた男たちはずっしりとしたパンを大切そうに持ちあげると、うれしさのあまりうつとりとなった。それから外に出て犬から引き具をはずし、巨大なムース肉のかたまりを持ってきた。一目見るや、兄弟の口はよだれでいっぱいになった。男たちがパンを求めているのに負けないくらい、二人は肉を求めているのだった。

「ポーターハウスステーキに」ジョージがささやいた。「フィレ、サーロイン、それにも肉のステーキ。レバーベーコン。リブローストに、揚げパンつきのシチュー。ほらクラレンス、今のも献立に追加だ」

「むちや言わないでくれよ。僕が作るんだから、仕切るのだって僕だ。兄さんは指示に従ってくれればいい。肉を持って向こうの小屋に行ってきてくれ。夕食の代わりに好きなだけくれるっていうんだ、見合うものを作らなきゃ」

空腹の男たちはベッドに座り、満足そうに調理を見守った。クラレンスはパンを

焼こうと生地をこねている。そこにジョージが、コップ一杯ぶんのドライアップルとプルーンを五つ持つて帰ってきた。砂糖がなかったことに兄弟は肩を落とした。それでも盛大なごちそうができることは間違いなく、デザートなどささいなことですぐに忘れてしまった。

クラレンスはベーコンの脂でパイ生地の歯ざわりをよくしていた。ちょうどそのとき二台めのそりが小屋に停まり、またひとり見知らぬ男が入ってきた。玄関に立つその姿は、鮮烈な印象をもたらした。眉にもまつ毛にも氷が絡まっているのに、顔はきれいに剃られすべすべとしてなにもない。ビーズで飾られたモカシンに始まり、大きな装甲手袋、そして狼の革が使われたシベリア産のキャップにいたるまで、装飾品のひとつひとつから、この男がドーソンに金鉱を持つ富豪「エルドラドの王たち」のひとりであることは明らかだった。

彼のがっしりとしたあごと鋼色の目には、ただならぬ決意があらわれていたが、人好きのする男だった。かたく締められたレザーベルトに、大きなコルト・リボル

バー二丁と狩猟用ナイフ一本が収められており、片手にはこの地でおなじみの犬用の鞭と、最も口径の大きい最新型の無煙ライフルを持っていた。クロンダイクの男たちはめつたに武装することがないため、四人は不思議に思った。そしてその用途にも思いをめぐらせた。

話はすぐに打ち明けられた。五日前、五百ドルの申し出を断ったばかりの、この地選りすぐりの七匹からなる犬ぞりチームが盗まれた。男は手がかりをつかみ、犯人グループがドーソンから雪道に出たことを知った。友人から犬を借り、今は犯人を追っているところだという。

追跡の速さに四人は驚いた。深夜にドーソンを出たとすれば、この十二時間のうちに七五マイルも進んできたことになる。男はふたたび犯人を追う前に、犬を休め自分も数時間ほど眠りたいと言った。絶対に追いつけるはずだ、と彼は言う。間の抜けたことにあいつらときたら、一八インチのそりで走っているんだ。ふつうユーコンの雪道を走るとなれば、そり幅はせいぜい一六インチでもんだ。だから奴ら

のそりのひとつは、かならず滑走部で新雪をならさなきゃならない。一方こっちの道は、もう仕上がってるってわけだ。

その犯人グループに、兄弟は見覚えがあつた。もう十二時間あれば追いつけますよ、そう言うとも男はほっとしたようだった。新たな来客は歓迎され、夕食に招かれることになった。驚いたことに、男は外で放した犬に餌をやり終えると、いっぱい砂糖とコンデンスミルクを二缶かかえて戻ってきた。

「こんな川の上流じゃ君たち、贅沢できないんじゃないか」と彼は言い、テーブルにどさつと食料を置いた。「身軽に動きたかったし、機会さえあればいつでも豆や小麦粉と交換できると思ってね、こいつらを持ってきたんだ。いいんだ、礼にはおよばんよ。一緒に食事ができるんだから。頃合いになったら呼んでほしい」そう言つて男はベッドによじのぼると、一瞬のうちに眠りに落ちていった。

「なあ、ジム。これぞそり引きつてやつだろ？」メイジーマイの男が、まるで自分がやってのけたかのように誇らしげに言った。「十二時間で七五マイルだ。こんなに

寒けりやその半分の時間も乗れないだろう。おまえだったら、すっかり消えちまってるだろうよ」

「このおれにできないだと」相棒が言い返した。しかしジムが旅人としてのおのれ
の能力を語ることはなかった。二人の犬が新たな訪問者の犬と喧嘩を始め、仲裁に
行かねばならなくなったのだ。

待ちに待った夕食ができあがり「エルドラドの王」を起こしていると、おじのハ
イラムとカーター氏が帰ってきた。

「ドーソンでは砂糖もミルクも品切れだそうだ」とハイラムが言った。その砂糖と
ミルクがテーブルにあるのを見て、おじは啞然とした。そしておずおずと、一クオ
ート缶の精製はちみつをさし出した。はちみつがおじからの寄付だった。

献立にはさらに書き足しが必要となった。全員が席につくと、一品目のモックタ
ートルスープが、はちみつがけのパンケーキと一緒に供された。メイジーメイの男
たちが「人間らしい食いもの」と呼んだごちそうがテーブルに次々とあらわれた。

二人の目は大きくひろがり、言葉が出てこないようだった。

サプライズはまだひとつ残されていた。チリンチリンというベルの音が聞こえ、雪まみれの旅人がもてなしを求め入ってきた。新しい来客は共同通信社の記者らしく、アメリカからユーコンに向かっているところだった。ハイラム・ドナルドソンさんはこのあたりにいらっしやいますかね、と記者は最初にたずねた。「ユーコンで野営キャンプをされていて、今はスチュワート川の河口あたりにいるとお聞きしたのですが」兄弟がおじを指さすと、記者はハイラムに手紙を渡した。それは、おじであるミスター・ドナルドソンが代表を務める採鉱シンジケートからの紹介状だった。これだけではない。手紙でいっぱいの郵便袋まで取りだされ、男たちに回されていたのだ——念願の家からの手紙だった。

「なんてこった！ いちばんのお楽しみがきやがった」最後の来客用の場所が作られると、メイジーメイの男が言った。相棒はというと、りんごのダンプリングで口がいっぱいで、目をぱちくりさせて同意するしかなかった。

「『b』がなんの略かわかったぞ」ジ
ョージが向かいのクラレンスにささやいた。
「僕もだよ。すご^gくⁿいい^rだ^sったんだ。『B』は大文字だね」